

「壬辰戦争」の講和交渉 Peace negotiations of "Imjin War"

荒木 和憲 (国立歴史民俗博物館)

発表要旨

「壬辰戦争」の停戦（1598年）から日朝国交回復（1607年）までの過程を、対馬一朝鮮間の外交交渉の展開に即して考察する。

まず、日朝間を往復した外交文書の文言を分析し、どのような言説・論理が講和を導いたのかを検討する。たとえば、1601年、朝鮮は対馬の宗義智に書契を送り、「聖人の心」「王者の道」を説いている。これは「未来を志向して過去に固執しない」との姿勢を表明し、講和の条件として日本側の誠意と反省を求めたものである。昨日までの「不俱戴天」の敵との講和を正当化するための儒教的論理といえる。また、外地の対馬を「内地の赤子」に等しい存在と表現し、日本側の軍事行動を阻止するよう要求している。朝鮮側は対馬との羈縻関係の回復を戦争終結のための有効な手段と認識しており、これに呼応するように、対馬側も「東藩」としての立場を表明する局面がある。

つぎに、朝鮮の羈縻政策に関して、朝鮮—対馬間だけでなく、北方の「藩胡」（女真族）の問題も含めて検討する。たとえば、朝鮮は「藩胡」を懐柔するため、1600年に漢城ではなく咸興での交易を臨時に許可し、1604年には対馬にたいして釜山浦での交易を臨時に許可した。後者は日本人の漢城への上京禁止、および釜山浦での外交・貿易という近世日朝関係の基本的な枠組みへと展開する。これは「藩胡」と「東藩」の経済的欲求にパラレルに対応しようとする羈縻政策の一端といえる。

略歴

〈 荒木和憲 / ARAKI Kazunori 〉

2001年九州大学文学部卒業。2006年九州大学人文科学府博士後期課程修了。博士（文学）。

現職は、国立歴史民俗博物館准教授。

専門分野は、日本中世史・東アジア交流史。

主な著作：『中世対馬宗氏領国と朝鮮』（山川出版社、2007年）、『対馬宗氏の中世史』（吉川弘文館、2017年）